

聖書:サムエル記第二6章1～11節

説教:なぜ神は怒るのか

はじめに

今日からイエス・キリストの御降誕を待ち望むアドベントが始まります。待ち望むというからには、少なくとも二つのことを知らなければならぬ。一つはだれを待ち望むのか。二つ目、あたりまえのことですが、なにも知らされずに待つことはできません。事前に「これから来ます」と教えられて初めて待ち望むということができる。待ち望むということには、この二つが含まれる。私たちは、聖書からイエス・キリストを待ち望むという知識を覚えてもらったので、アドベントという機会をもつことができるわけです。その一つの箇所として今回はサムエル記第二6章、7章をとりあげていきます。ここに描かれている衝撃的な事件を読んで、これは一体どういうことかとみなさんはとまどっておられるのではないかと。でも、実はここに大切な救いの知らせが込められています。

1 神の箱を移す

1) 動機

まずこの箇所の背景からみていきましょう。イスラエルの初代の王であったサウルは戦いで倒れ、ダビデが二代目の王に就いてまだ間もない頃のことです。王が交代するにあたりたいへんな問題がいろいろあったのですが、それらをなんとか乗り越えて一息ついたとき、ダビデはずっと以前から気になっていた神の箱をどうにかしなければと考えるようになります。というのは、これまでいろいろないきさつがあって、神の箱は丘の上にあるアビナダブの家に一時的に置かれていた状態でした。これを自分が住んでいる町に移して、しっかりと守りたいと考えます。

2) 三万の精鋭、新しい荷車、パレード

言うまでもなく神の箱はイスラエルにとって特別な存在です。ダビデにとっては、イスラエルの王になって初めての公式の宗教セレモニーになります。それでかなり入念な計画を立てた。ポイントは三つあります。一つ目は三万人の軍隊を集めたこと。二つ目は新しい荷車つくったこと。いまでいうなら、VIPが乗る高級なリムジンということでしょうか。これに神の箱を載せて運ぶことにしました。そして三つ目。神の箱を載せた荷車が通って行くとき、沿道に集まった人たちがいろいろな楽器

を鳴らしながら踊るように指示したこと。こうしてダビデは国家的事業として大々的に挙行します。

2 ウザ打ち事件

1) 神の箱をつかんだ

準備がすべて整ってパレードの当日がきました。神の箱を載せた荷車は牛が引く。そのため箱の前にはアフヨ、後ろにはウザがそれぞれ立ち、荷車が滞りなく進んでいくようにコントロールするようにした。ところがナコンの打ち場まで来たとき、牛が何かに驚いて暴れたため神の箱が荷車から落ちそうになった。それを見たウザはとっさに手を伸ばし、神の箱をつかんでしまいます。

2) 主の怒り

その瞬間です、7節。「すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、神はその過ちのために、彼をその場で打たれた。彼はそこで、神の箱の傍らで死んだ。」これが「ウザ打ち」と呼ばれる事件で、いろいろ議論がある箇所です。みなさんも感じておられるように、どうしてウザは死ななければならないのか、その理由に納得できないからです。ウザが打たれたのは「その過ちのため」だったとありますが、どこが過ちだったのか。神の箱が傾いて荷車から落ちそうになったら、だれだって手を伸ばして押さえようとするはずです。そんなごく当たり前のことをしただけでどうして死ななければならないのか。神はなんと理不尽なことをなさるのか。そう感じたはずです。大切な問題です。このことについて考える前にダビデのことを先に見ていきます。

3) 恐れるダビデ

8, 9節。「ダビデの心は激した。主がウザに対して怒りを発せられたからである。その場所は今日までペレツ・ウザと呼ばれている。その日、ダビデは主を恐れて言った。『どうして、主の箱を私のところにお迎えできるだろうか。』」「ダビデの心は激した。」ダビデはこんな事故起きるとは予想していなかったでしょうし、ましてウザが主が打たるとはまったく考えていなかった。それでダビデは腰を抜かすほど驚きながら、神が何に対して怒りを発しているのかを考え始めます。とにかくこのまま計画を進めることはできません。とりあえず

ガテ人オベデ・エドムの家に神の箱を回すことにした。念入りに計画したはずのパレードは最悪の結果となり、王としての面目は丸つぶれとなってしまいました。

3 ダビデの罪

1) なぜ

さて、私たちが知りたいのは、どうしてウザが死ななければならなかったのかということです。ウザはごく当たり前のことをしただけ、死ななければならぬほどの重い罪を犯したとはとても思えません。いっぽう神は理由もなく怒る方ではけっしてありません。ここには必ず深い理由があるはずです。このことを考える上で参考になるのは、歴代誌第一15章13節です。このことと同じ記事を扱っている箇所、ダビデはこの事件についてこう語っている。「最初の時には、あなたがたがいなかったため、私たちの神、主は私たちに怒りを発せられた。定めにしたがって、私たちが主を求めなかったからだ。」「最初のとき」とは、ウザが打たれたときのこと。「あなたがた」とはレビ人のことを指しています。つまり、本来契約の箱はレビ人の手によって担がなければならないものだったのだとダビデは告白しています。ところが、ダビデはレビ人に担がせるのではなく、わざわざ新しい荷車を作ってそれで運ぼうとした。そのうえ自分の考えて三万人の兵士を招集し、道にはなかば強制的に人を並ばせて楽器を鳴らさせ、とにかく見えるところを豪華に飾った。

おわかりでしょうか。ダビデは、主が定めた手順に従わなかったのです。主に何おうともしなかった。ひとこと言えば、自分のプライドを誇るために神の箱を利用した。そのためウザは死んでしまいました。ウザが打たれた根本の原因はダビデの罪にありました。打たれなければならなかったのはダビデのほうでした。ダビデはそのことを示され、悔い改めをしていきます。

しかし問題は残ります。ウザは打たれたのに、罪あるダビデはなぜ打たれなかったのか。神はダビデをことさらに愛していたからか。いいえ、罪は罪です。ここで新たな疑問がわいてきます。

2) 悔い改め

ダビデは、この事件が起きるまで自分が間違っていたことをしているとはまったく気がついていなかったようです。自分の罪に気がついたのは、ウザが主に打たれたのを見たときです。「神の箱を大切にする。」そんなまことに信仰深いことを言いなが

ら、自分のプライドを誇る絶好の機会として利用しようとした、高慢の罪が自分の中にあったことに気がつきました。そんなひどい罪をかかえたまま神の箱を迎える資格は、自分にはない。それでとりあえずということで神の箱はガテ人オベデ・エドムの家の家に回すことにしました。

この決定を聞いたオベデ・エドムには青天の霹靂だったでしょう。ウザ打ち事件を見たばかりですから、自分のところにもわざわざ降りかかるのではとおびえたと思うのです。ところが神の箱が来てみると意外なことに、主はオベデ・エドムの家を祝福された。ウザに向かって燃え上がった怒りは去ったことがわかりました。このあとのことはまた次回詳しく見ていきますが、ダビデはオベデ・エドムの家が祝福されていることを知って、もう一度神の箱をダビデの町に移す決心をすることになります。

3) イエス・キリスト

最後に考えます。罪あるダビデの指示に従って忠実に奉仕していただけなのに、ダビデではなくなぜウザは主の怒りを被って死ななければならなかったのか。二つのことが言えます。一つ。ウザは崩れ落ちそうになっていた神の箱に触れたために神の怒りを受けました。神の箱はただの箱ではありません。モーセの時代からずっと神の箱は神の臨在をあらわしています。ダビデの時代から数えておよそ千年後に来られたイエス・キリストは神そのものであります。この方は私たちの罪を背負われて十字架に向かわれ、十字架の上でそのみからだが裂かれました。もし契約の箱がイエス・キリストの現れだとするならば、契約の箱はほんらい崩れ落ちるものとして計画されていたのです。十字架のみわざをとめてはならないのです。ウザはそのことを知らずに箱に触れてしまいました。

二つ目。それだけではまだ納得できません。ダビデではなく、なぜ無実のウザが打たれるのか。十字架の上にかかれたイエス・キリストのみわざの意味を考えてみましょう。ウザが自分の職務に忠実に奉仕して打たれたように、イエス・キリストも父なる神に最期まで忠実に従われました。ウザはダビデの身代わりとなって打たれました。イエス・キリストは私たちの罪の身代わりとなって死んで下さることを示しています。

ウザ打ち事件をとおして、私たちは改めて救い主がどのような方であるのかを教えられます。私たちが罪から救って下さるイエス・キリストを信じて待ち望んでいきます。